

2009/09/30

福沢諭吉と『学問のすすめ』

京都大学総合人間学部 2 回生、安達千李

I 背景など

1、近代日本思想～江戸時代が終わり明治時代に入って～

- 日本の啓蒙思想あるいは啓蒙運動は、明六社を中心に展開される。
- 啓蒙思想の基本的な意は、伝統的なものの見方・考え方を無批判的に受け入れる態度を否定し、迷信盲信の類から人々を解放する立場や運動のことである。

2、明六社

- 明六社は、1873 年に森有礼が発起人となり結成されたグループである。森はアメリカから帰国して以来知識人の会合の必要を説いていた。
- 明六社という名前の由来は至って単純なもので、明治 6 年に結成されたので明六社と命名されたわけである。
- グループ結成後、『明六雑誌』を発行し、市民の啓蒙（迷蒙を啓くこと＝迷信から人々を解放すること）に励んでいた。
- 毎月 1 日と 16 日に会合をもち、政治・法律・経済・文学・教育・自然科学・思想・風俗などを論じた。
- 同グループには西周、西村茂樹、中村正直、加藤弘之、福沢諭吉らがいた。当初 10 名だったメンバーはのちに 30 人を超す。
- その特徴は、愚民観と政府の文明開化（西洋の学問や技術を積極的に導入すること）と富国強兵（国力をつけ、軍隊を強くすること）の肯定にある。
- 愚民観とは、一般人は迷信を信じて疑わない愚か者、したがって自分たちが彼らに理性の働かせ方をおしえてやらねばならないという考えのことである。

3、福沢諭吉（1835-1901） ※詳細は別資料参照

- 『西洋事情』・『学問のすすめ』・『文明論之概略』などの著作が有名。
- 下級武士の子として育つ。父親は身分制度のため、出世できなかった。→「門閥制度は親の敵で御座る」（『福翁自伝』）といった。
- 昭和 59 年年から一万円札の表に肖像として登場。（ちなみに、現行一万円札の裏は

平等院鳳凰堂に据えられている国宝の鳳凰像)

- 福沢諭吉の立場の 4 つのポイント

- ① 天賦人權論と独立自尊

天賦人權論とは、自然権思想すなわち人間は生まれながらに自由で平等であるという考え。『学問のすすめ』にて「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」と、貴賤上下差別の否定を表明した。

独立自尊とは、「奴隸根性」(＝依存心)を克服し、独立心を身につけろという考え方。形だけ欧米文明を導入するのではなく、まず自ら考え判断し、自分のことは自分で支配する(＝決める)という姿勢を確立することが大切であるという。

➤ 天賦人權論を前提とした独立自尊こそ、福沢諭吉の民権論の立場である。

- ② 実学

実学とは、社会で役に立つ学問のことである。具体的には数理学(＝物理学)・地理学・経済学などを指す。実学の素養の有無が貴賤の差として現れると考えていた。(今でいう高学歴エリートコースとか・・・)

- ③ 「一身独立して、一国独立す」(国家論)

欧米列強と対等に渡り合うためには、国民一人一人が、すなわち個人がまず独立自尊を確立せねばならない。

- ④ 脱亜論

『時事新報』にて発表された考え方。アジアの文明(＝中国・朝鮮半島)は野蛮である。日本は中国・朝鮮半島と友好関係にあるが、彼らとは手を切らねばならない、とする。欧米列強によるアジア侵略やむなし、とする立場。国権論にもつながる。

- 慶應義塾の創立者でもある。

Ⅱ 課題本『学問のすすめ』

本編に入る前に

- 福沢諭吉 39 歳の時に初版が刊行された。前年、郷里の大分県中津に市学校が開校されるに際し、学問の趣旨を記した。これを小冊子にしたものが同書である。冒頭の「天は～」という警句は、特に青年層に強い衝撃を与え、同書は大ベストセラーとなる。つぎつぎに続編が書かれ 17 編まで刊行された。発行部数は海賊版も含め 70 万部になる。当時の日本人の 160 人に 1 人は読んでいたとされる。これほど多くの庶民に読まれた理由は、当時の緊急課題であった近代化に必要な「数理学と独立心の意義」を一般大衆向けに熱く説いたから。福沢のユーモア・正義感も。過激

さもあり。

- 文章は威勢よく話しているような語り口になっている。福沢自身「書いたものは、まず下女に読ませた」と語っている。論旨が明快で、わかりやすい文章。
- 独特な訳語あり。science→実学、scrap and build→掃除破壊と建置経営、martyrdom（殉教）→マルチルダム そのままカタカナ読み
- 学問の目的を懇切に説いた。
- 当時色濃く残っていた身分制社会を変えようとした。「人間普通の実学」は身分にかかわらず学ぶべきで、「何のためかといえ、個々人の独立のためであり、それが国家の独立の基礎にもなる」と説いた。

初編～学問には目的がある～

人は生まれながらにして平等である。現実に賢愚・貧富の差があるのは、学ぶか学ばないかによる。（属性主義でなく、業績主義をとる。）この際、実学を学ぶ必要がある。これによって一身は独立し、自由となる。自由と我儘とは異なる。学問はそのため、自分の分限（自分がもつ権利の範囲）を知ることである。これは国の場合も同様である。一身・一国の自由・独立を侵すものがあれば、世界を敵にしても恐れることはない。

人民が無知・文盲ならば政府は威力で押さえつけるようになる。「愚民の上に苛き政府あり」。よき政府は、人民の品性によって決まる。そのためにも人は学問をし才能と人格を磨くこと（国民という身分にふさわしい知徳を身につけること）が何よりも大切である。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。されども今、広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。その次第はなほだ明らかなり。『実語教』に、「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとによりてできるものなり。

自由とわがままとの境は、他人の妨げをなすとなさざるとの間にあり。たとえば自分の金銀を費やしてなすことなれば、たとひ酒色に耽り放蕩を尽くすも自由自在なるべきに似たれども、けっして然らず、一人の放蕩は諸人の手本となり、ついに世間の風俗を乱りて人の教えに妨げをなすがゆえに、その費やすところの金銀はその人のものたりとも、その罪許すべからず。

→「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ、人ノ下ニ人ヲ作ラズ」は、「トイヘリ」という伝聞の表現に続く。これは、アメリカ独立宣言の”all men are created equal”（すべての人は<天＝創造主>によって平等に造られている）を受けてのことだといわれる。

二編 人は同等なる事～人間の権利とは何か～

学者：物事の道理をわきまえた人。家を建てられる人。Cf. 槌、ノギリの例え。

文字の間屋：本を読めるだけの人。道具の名前を知っているだけの人。

古事記は暗証すれども今日の米の相場を知らざるものは、これを世帯の学問に暗き男というべし。

人が平等であるというのは権利義務の平等を指す。権利とは、人の生命・財産・名誉を重んじるということ。天が定めたものであり、人間が冒してはならない。元来、人民と政府との関係は同一であったが職分を区別し、政府は人民の名代となり法を施し、人民は必ずこの法を守るべしと固く約束（御恩と奉公の関係ではなく、契約！）したものである。人民も努力をしなければならないのであって、すぐに学問に志才能と品格を磨き、政府と相対し同等の資格と地位に立つだけの實力を持たねばならない。

三編 国は同等なる事、一身独立して一国独立する事～愛国心のあり方～

国も権利義務において平等である。したがって、道理に基づいて行動すべきである。一身独立して一国独立するとはこのことである。ただし、人民に独立の気力がなければ一国独立の権利を訴えることはできない。

①独立の気力なき者は、国を思うことも深切でない。

②独立の自覚なき者は、外国人と交わっても自己の権利を主張できない。

③独立の気力なき者は、他人に頼って悪に走る。

独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐る者は必ず人に諂うものなり

四編 学者の職分を論ず～国民の気風が国を作る～

日本が独立・文明国になれるかは定かでないが、日本人である以上、国民と政府は分限を尽くし協力して独立を維持するしかない。学術・商売・法律の三点で日本は外国に劣る。

この3点は国家独立のために必要。一国の文明は政府の力のみによって進むものではない。日本には政府があるだけで未だ国民はないとも言える。そこで、私立（福沢もここに与する。福沢自身学術を講じ、商売に従事し、法律を議論した。）が必要となる。私立も在官も等しく日本人であれば、ただ地位を異にするだけであって、敵ではなく、全国の便利を目的とする真の益友である。

五編 明治七年一月一日の詞～国をリードする人材とは～

文明の精神とは人民独立の気力である。政府が頻りに学校を建て、工業を進めてもそれだけではダメである。政府がすべてのことをやってしまうと人民はいつまでも宿屋の居候の気分。国の文明は政府や一般庶民からではなく、中流階級でから起こり、それが政府と並び立って初めて成功する。つまり、私立の人民が文明を起こし、政府はそれを保護する役目を果たす。いま日本で中流階級の役割を果たせるのは、学者のみ。政府に依頼せず文明をそだてるべき。本を読むだけでなく、実際に事を起こすべき。

六編 国法の貴きを論ず～文明社会と法の精神～

政府は国民の代理として警察を司法を担う。個人が悪人から身を守るのは大変なため、政府に防犯を依頼し、その費用を税金で賄うことを約束した。したがって、法を破るということは自分が作った法（??）を破るということになる。私刑、暗殺は誤りであり、法（できるだけ簡潔にすべき）が不便なら遠慮せず論じ訴えるべきであるが、法が施行されている間はその法を守らなければならない。

昔、徳川の時代に、浅野家の家来、主人の敵討ちとて吉良上野介を殺したることあり。世にこれを赤穂の義士と唱えり。大なる間違いならずや。この時日本の政府は徳川なり。浅野内匠頭も吉良上野介も浅野家の家来もみな日本の国民にて、政府の法に従いその保護を蒙るべしと約束したるものなり。

この編において福沢は「文学科学」という表現を、「語学」の上位にある「文学という個別学科」の意味で使っている。英語の *discipline*(学問分野)に相当か。

七編 国民の職分を論ず～国民の二つの役目～

国民は一国の政府であるとともに、政府によって規制を受ける客体でもある。行政・外交・防衛などは社会契約によち政府に与えた権利だから、国民は不当な理由なしにこれらを破ってはいけない。何か不都合があれば、法は守りつつも大いに論ずることがで

きる。しかし、政府がその分限を超えて暴政を行った際、人民は政府にいやいや従う（→これでは愚民と権威主義的政府という構図の再生産）ことなく、また、力で対抗する（→内戦になれば正しさでなく強さがものをいう）ことなく、正しい道理を政府に訴えて迫るべきである。

かの忠臣義士が一万の敵を殺して討死するも、この権助が一両の金を失うて首を縊るも、その死をもって文明を益することなきに至りてはまさしく同様のわけにて、いずれを軽しとしいずれを重しとすべからざれば、義士も権助もともに命の棄てどころを知らざる者と
言いて可なり。

- 六、七編において討ち死にを批判（吊い合戦が続くだけで、社会を害すること甚だしい。テロリズムで社会がよくなったことはない）したため、当時大変な批判を受けた。
- 文明にとって有益な Marthyrdom(マルチルドム)に値する死は佐倉宗五郎のそれただ一つ。

八編 我心をもって他人の身を制すべからず～男女間の不合理、親子間の不条理～

他人の権利を妨げない範囲で、人は自由に行動することができる。独立と孤独は違う。交流はすべき。政府と人民、男と女の関係でも同様である。

妻妾、家に群居して家内よく熟和するものは、古今いまだその例を聞かず。妾といえども人類の子なり。一時の欲のために人の子を禽獣のごとくに使役し、一家の風俗を乱りて子孫の教育を害し、禍を天下に流して毒を後世に遺すもの、あにこれを罪人と言わざるべけんや。

親子関係について。親孝行は良いが、強制はできない。人間が動物と異なるのは、ただ子供を育てるだけではなく、教育して社会化する点である。

九編 学問の旨を二様に記して中津の旧友に贈る文～よりレベルの高い学問～

人の心身の働きには二つある。衣食住の安楽を致すものと、社会関係を求めるものである。人は、衣食住の安楽に満足する（ここで満足しては動物と同じ）ことなく、人間交際の義務を重んじ、高遠な志を掲げてきた。我々は先人のこのような努力の上に立っている。学者として世のために勉強し、遠い後代に貢献したい。

明治維新は戦争の変動ではなく、文明にさらされた人心の変動である。この機会を生か

して、学者は社会のために大いに勉強すべきである。

Ⅲ 話し合ってみたいこと

ホントに人情は和らぐのか？～斉藤孝訳のチェックもかねて～

岩波文庫版 p. 57

西洋諸国日新の勢いを見るに、電信、蒸気、百般の器械、随って出れば随って面目を改め、日に月に新奇ならざるはなし。

啻に有形の器械のみ新奇なるに非ず、人智いよいよ開くれば交際いよいよ広く、交際いよいよ広ければ人情いよいよ和らぎ…（略）、九編より

ちくま新書版 p. 124

西洋諸国が日ごとに発展する勢いを見れば、電信・蒸気・あれこれの機会など、どんどん出るにつれてどんどん改良され、日につきに新しくならないものはない。

進歩は、形ある機械に限ったことではない。知恵が発展するにつれ、人間同士の交流もますます活発になり、交流が活発になれば、人情もますます穏やかになり…（略）

☆ インターネットや携帯電話、またそれによるウェブ接続が一般化した現代においてもこの考えが妥当だとは考えにくい。2ch では罵倒しあいもよく見かける。Mixi や facebook などの SNS サービスが拡大し、また、メールや SMS や skype など頻繁に使われるようになったいま、人間関係に必要以上に意識がとられるという状況に陥っていると感じる。果たして、このような時間や空間の束縛を受けにくい関係が深く根ざしている我々に独立はありうるか？どう距離をとるべきか？また、現状に対して積極的な意味づけはできるのだろうか？

Ⅳ 参考文献（と、雑感）

- 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波書店、1942 年
→文語文はやはり読みにくい。情けないですが…。レジュメ作成においてはほぼ斉藤孝版を参照した。有名なパート「天は人の上に～」くらいはせめて原文で読みたいところです。
- 福沢諭吉『現代語訳学問のすすめ』ちくま新書、斎藤孝訳、2009 年
→読みやすい。本書の解説にあるようにビジネス書のノリで読める。
- 加藤寛『なぜ、今、「学問のすすめ」なのか？』PHP 文庫
→主に要約を参照した。斉藤孝訳版がでたからそっちのがよさそう。
- 佐々木力『科学論入門』岩波新書、1996 年
→「科学」「学問」といった言葉がゴッチャになったので少しだけ参照。著者は「

パラダイム」という述語の祖であるトーマス・クーンに師事していた人らしい。題名の通り科学論の入門によさそうなので、後期読みます。

- 稲田義行『これならわかる倫理』山川出版社、2004 年
→受験生時代の愛用品。以上。